

生徒の学力と地理の授業について

武市 伸幸

1. 高知県の私立学校での社会科の授業

生徒の学力と地理の指導を考えるにあたり、筆者の私立中学高等学校の経験から、望まれる授業と教員の資質についてまず述べる。

中堅の私立中学高等学校の使命は大学受験でいかにより成績を上げるかということである。そのため、必然的にその授業は講義形式が中心となる。筆者が勤務していた当時の高知県の私立中学校社会科の授業の場合、おおむね1年生は地理、2年生の初めから3年生の1学期期末テストまでは歴史、3年生の2学期と3学期は公民という科目配分になり、教科書に沿って教科書以上の授業が行われていた。したがって、作業学習や問題解決学習、調べ学習および調べた内容の発表という形態はまず取られていなかった。この理由としては、一学年を複数の教員で担当するため、進度や内容を合わせる必要があること、テストの範囲がほぼ決まっておき、時間的余裕がないことなどが挙げられるが、その他に、毎年同じ時期に同じ内容の授業をすればよいのだから、特に予習をする必要もなく、毎年同じ授業をすればそれでよいという教員の意識もあったと思われる。

私立学校ではカリキュラムの編成は比較的自由に行われており、特色のあるカリキュラムをもつ学校もある。たとえば、キリスト教系列の学校では宗教関連の行事が行われており、クラブ活動を重視する学校では体育に重点が置かれている。進学校では授業の先取りが行われ、数学などでは中学3年で高校1年の数学を済ませる学校もみられる。

私立中学校では入学テストで生徒を採るので、上位校や中堅校の場合、生徒の能力は比較的そろっており、それなりの性格の生徒を採るので、授業態度もそれなりに良い。そのため、授業は比較的楽に行うことができる。すなわち、授業開始のチャイムが鳴ると生徒たちは一応席に着き、授業中は前を向いて授業を聞いてくれる。しかし、ある特定の先生の授業は騒がしくなる場合がある。

では、どのような場合に授業が騒がしくなるのだろうか。筆者の経験から3つの場合が挙げられる。まずその第1は、若い新人教員の場合である。この場

合は生徒たちになめられて授業が騒がしくなる。最初から厳しく臨まなかった場合は、経験を積む以外に対処方法はない。次に授業が面白くない場合がある。会議等で経験があると思うが、教えている者がつまらないと思った授業は、聞いている生徒はもっとつまらなく感じている。筆者は年輩の教員から「やっている人が面白くないと感じる授業は、聞いている生徒はその10倍も面白くないと感じている」と言われたことがある。社会科においても、ただ事実の羅列等の授業ではつまらないのは当たり前で、授業の工夫が必要であり、先生の能力が問われている。第3に授業が下手な場合がある。特に社会科先生には多いと思われるが、いつも板書のみで授業を済ませる先生がいる。筆者の知人中では、黒板いっぱい書いては消し、書いては消しを3回も行う社会科も先生もいた。このような先生の授業は板書を写すだけで、せっかくの授業が面白いわけがない。また、黒板に向かって小さな声で何か話している先生もいたし、声は大きいものの、話に脈絡がなく、聞いていても何を言っているのか解らない先生もいた。数学にも3番目のタイプの先生がいたが、生徒は全く理解できてなかった。これらの先生の授業は必然的に騒がしくなるか、お昼寝の時間となる。

それでは、社会科の授業はどのような授業がいいのだろうか。筆者はこれから教員を目指す人たちに、授業を行うにあたって次のことを望みたい。

①板書はきちんと行うこと

板書はその日の授業の成果であり、教師にとってはそれが商品である。生徒には先生に対する選択権なく、強制的にその先生の授業を受けさせられる＝その先生の商品を買わされている、ということを忘れないでほしい。1回の授業の板書量は一度書いたものを消さない程度にするのがよいが、社会科ではそうもいかず、黒板を2つに分け、1回全面に書いて半分は消して次の内容を書く程度にまとめるとよい。

②授業時間の配分について

50分授業なら、教科書の内容を35分、関連の雑談等を15分程度するつもりで授業を行うと、生徒も飽きずにより授業ができる。そのためには、絶えず書物(授業用の参考書ではない)等を読んで知識を仕入れ研鑽を積まなくてはならない。

③教材研究と事前準備は十分に行うこと

社会科の授業はおおむね、10のことを勉強してきて、そのうち一つ話すくらいのもりで行うとよい。先生がいろいろなことを知っている生徒に悟らせ

ることが大切で、そうすると生徒に尊敬される先生となることができる。決して自分から自慢してはいけない。評価は他人がしてくれるものであり、自分は絶えずよい授業ができるよう能力の向上を図るべきである。これを行わないマンネリ化した社会科教師がたくさん存在する。

さて、まじめな新人教師にありがちなことだが、勉強してきたことをすべて話そうとして何を言っているのか分からなくなることが多々ある。これを私は「話が空中分解する」と呼んでいた。新人のころ、私も勉強してきたことをすべて説明しようとして、結局何を言っているのか解らなくなったことがあった。授業が終わって、そのクラス(自分が担任のクラスだったが)の委員長がわざわざ出て来て言った言葉が忘れられない。

「先生、自分で何言いよったか解った??」

その後、二度とこの言葉を生徒に言わせないように、毎時間授業の構成を考えてしっかり予習を行うとともに、話す順番の練習を行った。

それでは興味ある授業を受けるため、生徒は何を教師に望んでいるであろうか。それには授業に対する要望と教師の資質に対する要望があるように思われる。

①授業に対する要望

授業に対する要望は、端的にいうと分かり易い授業を行ってほしいということである。特に講義形式の社会科の授業は、教科書と資料集や地図帳を使って行われるので、興味のない生徒には全く面白くないこともあることが想像される。そこで教員は、生徒を授業に惹き付けるため、身近な話題を発端に、生徒が興味をもてる授業展開を行うことが重要になってくる。これは生徒の欲心を買う授業をすればいいというのではなく、一定の知的レベルを保ちながら、授業内容に関連する事項を織り交ぜ、前述の15分程度の雑談を有効に活用して生徒の興味・関心を引き付けるように心掛けるということである。

また、授業そのものについても、講義中心の授業一辺倒ではなく、作業や討論、発表などを入れて、生徒自らが活動する授業構成を心掛けるべきである。

②教師の資質に対する要望

教師の資質に対する要望としては、教師としての基本的な技量と公平さ、教師としての自信があると考え。ここで、教師としての基本的な技量とは、教え方や話し方、教える内容についていかに生徒の興味の喚起することができるかということであり、公平さとは、教師としての基本的な能力を備え、それらに基づいてわけへだてなく生徒に接する態度であり、教師としての自信とは、

常に自信をもって生徒に接することである。これらのことを成し遂げるには、日頃の切磋琢磨と向上心が重要で、自分の教える内容に自信がなければ、すぐに生徒に見抜かれてしまう。教員であるためには、教師はサービス業であり、その商品は授業内容であるということを十分に理解する必要があると考える。

2. 学力とは

今の生徒の問題として、私立中学高等学校においても、少子化の影響で入学試験の倍率が低下し成績の悪い生徒も合格させなくてはならなくなった結果、学力の低い生徒や理解力・根気のない生徒が多く入学してくるようになった。筆者の担当していた高等学校の地理においては、新任後しばらくの間は生徒たちは作業の色ぬりを楽しんだものだったが、10年も経つと、色ぬりもしんどの生徒が現れるようになった。

そこで、ここでは各学校段階における学力についてまず考えてみよう。

(1) 各学校段階で望まれる学力

大野・上野(2001)によると、暗記力、理解力、表現力その他知的能力は訓練して開花させるのにふさわしい時期があるとされている。そこで、ここでは大野・上野(2001)より、各学校段階で身に付けるべき学力をまとめてみる。

①小・中学校

小学校・中学校は勉強の基礎を形成する時期であり、基礎的知識の習得に重点を置くべきである。これは、考えるためには、考える基礎となる知識が必要なため、知識なく討論させると、ただの言い合いになる。筆者は中学1年生の地理の授業で環境問題のディベートを行ったことがあるが、討論する生徒たちはお互い調べたことしか知識がないので、相手の意見を聞いて討論しようがなく、しばしば一方的な発表になった。近年、詰め込み教育の弊害などと言われるが、小学校高学年から中学校2年生ぐらいまでの、覚える力の強い時期に基礎的知識をしっかりと覚えること、また、覚える能力を磨くことが重要で、基礎的知識の裏打ちがなければ、自分で考え判断し、また、他人と討論する力は育たないように思われる。

②高等学校

高等学校は考える力(学ぶ力)を身に付ける時期とされている。この時期には解かることと解からないことを区別できるようになるとされ、解らないこと

を理解しようという意欲が旺盛となる。しかし、解らないことに対する疑問や興味が湧くためには、蓄積された、問題を解決するための基礎知識が必要となる。筆者の経験から、この時期をどのように過ごすかがその後の人生に大きな影響を持つように思われるので、指導する教師の責任は大きいといえる。また、この時期は多少難しいことも解りだす時期であるので、知識の習得とともに思考力や表現力、また、論理的な考え方等を身に付けさせる時期でもあると考える。

③大学

大学は過去に学んだ知識をもとに、新しい知識を受け入れながら、未知のことを自分の力で解決していき、同時にその大切さを学ぶ時期とされる。大学は知識を学ぶ場であると同時に研究を行う場でもあるので、興味あることに積極的に取り組み、疑問を解決していく時期であると考えられる。

(2) 学力とは何か

では学力とは何であろうか。大野・上野(2001)は学力を「学んだ成果を示す学力」と「学ぶ力という意味での学力」に分けている。この分類は大学生までを含んだ分類と考えられる。したがって筆者は、教職課程の学生が就職後対応するのは中高生までなので、中学校や高等学校での学力を「学ぶ力(理解力)」と「学ぼうとする力」に分類したい。

①学ぶ力(理解力)

筆者の考える学ぶ力とは、授業内容を理解する力のことであり、授業の内容をすぐ理解できるか、すぐには理解できないが少し考えると理解できるか、いくら考えても理解できないかということである。残念ながらこの能力には生まれ持った差がある。筆者は、学習塾で教えていると何度同じことを教えても理解できない生徒がいることから、この能力の差を実感している。たとえば中学3年生の数学で、 $\sqrt{\quad}$ の計算を

$$\sqrt{3} \times \sqrt{3} = \sqrt{9}$$

で終わり、何回やらせても

$$\sqrt{3} \times \sqrt{3} = \sqrt{9} = 3$$

とならない生徒がいる。また、 $(x+y)^2$ の展開を

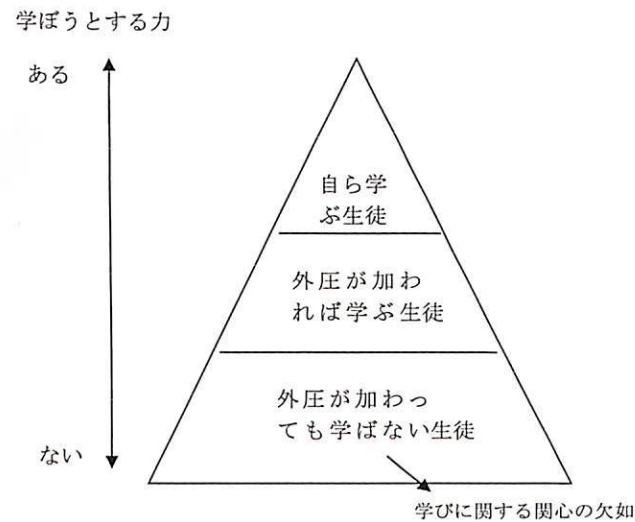
$$(x+y)^2 = (x+y) \times (x+y) = x^2 + xy + xy + y^2 = x^2 + 2xy + y^2$$

としかどうしても展開できない生徒もいる。そうかと思えば、難しい二次関数の問題や図形の問題をなんなく解いてしまう生徒もいて、生まれ持った理解力の差を実感する。

授業内容が理解できないということは、学ぶ側からみると何のために習っているのか解らないということであり、学習の目的がわからないということに繋がりがかねない問題であり、教える側からすると、何のために教えているのか解らないということに繋がる問題である。

②学ぼうとする力

筆者の考える学ぼうとする力は勉強しようとする力である。また、大学生についていうと、小学校から高等学校までに蓄積した知識を総合的に活用して、新しい事実の解明に立ち向かうことのできる力ということができよう。

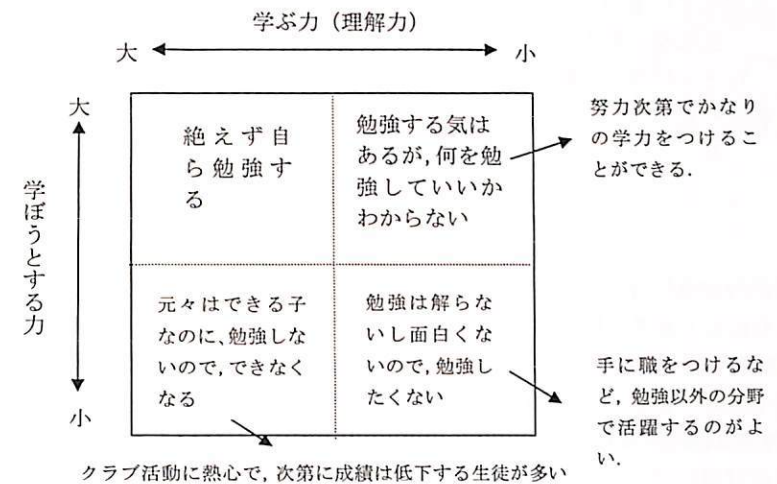


第1図 学ぼうとする力

第1図は学ぼうとする力を模式的に示したものである。学ぼうとする力がある生徒は、他人に言われなくても自ら勉強する生徒である。ここでの勉強は学校の授業の予習・復習だけでなく、読書や興味ある事柄を調べることでもよい。学ぼうとする力のない生徒は、勉強する意欲のない生徒であり、学習に意義を感じていない生徒である。このタイプの生徒はテスト前でもなかなか勉強しよ

うとしないし、テストの点が悪くてもあまり気にしていないように感じられ、勉強しなくても世の中楽に生きていけると思っている生徒である。両者の間に、大多数の、テスト前になったら勉強する生徒、あるいは言われたら勉強する生徒がいる。

学ぶ力と学ぼうとする力を模式的に示すと第2図のようになると考えられる。両者の力が少ない生徒は勉強に価値を見出していない生徒で、早く働きたい生徒であり、これらの生徒は無理に学校に行くことはせず、芸術やスポーツなどの才能を活かす、あるいは早く手に職を付けて現場で活躍した方が生き甲斐を見出せると筆者は考える。



第2図 学ぶ力と学ぼうとする力

3. 地理と作業学習

以上の学力について、筆者の考えをまとめた。それでは、学習意欲の乏しい生徒たちに地理を教えるにはどのようにすればよいのであろうか。

筆者が私立中学高等学校に勤務していたころから、学ぶ力・学ぼうとする力両者が弱い生徒たちが入学してくるようになった。これは第一に少子化により以前は入学テストに合格しなかったような生徒を入学させざるをえなくなったという学校側の事情も大きく関係している。これらの学習意欲の少ない生徒たちに地理を理解させ、学ぼうとする力を引き出す方法として、また、上位の生

徒たちに地理を楽しく学ばせる方法の一つとして、筆者は作業学習を取り入れた授業があると考えて実践してきた。

地理の作業形式の学習を分類すると次のようになると考えられる。

①広義の作業学習

広義の作業学習には次のような学習が含まれる。

- ・地名や産物の色ぬりグラフ作成（プリントと白地図）

地図帳を開いて山脈や河川、国名、都市名等を調べて白地図などに記入するあるいは色ぬりする。また、統計資料をみて各種統計グラフや雨温図を作成したりする授業で、一般的な地理の作業である。

- ・地形図その他の地図の作業

地形図の等高線をえとる、断面図を作成する、距離や高低差を調べるなどの授業で、高校地理でよく行われる授業である。

- ・観察や見学

野外に出てさまざまな施設や地形等を見学して説明を聞く授業で、事前に調べて行くと効果があるが、ただ聞くだけなら何も残らない授業となる。

②狭義の作業学習

これに対し狭義の作業学習にはシミュレーション教材など、自ら学んでいく形式の学習や地域調査、ディベートなどがある。

シミュレーション教材を用いた学習は人間行動から立地活動や生産活動に関係した教材が多数作成されており、その実施例は武市（2017）に示した。また、学校教育相談等で用いられる開発教育に関係したロールプレイを行う教材も、シミュレーション教材に含めてもよいと考える。

地域調査の分類と実施方法については武市（2019）にまとめた。地域調査で調べる内容としては、居住している地域や学校の周辺の気候・地形・産業・環境・観光などの調査と、特定の国や地域についての調査がある。前者は文献調査と現地調査が可能で、望ましい地域調査であり、後者は文献調査だけの調査となる。後者には各国の産業・文化・自然環境のまとめや、旅行計画の作成などが考えられる。なお、地域調査はそのまとめとしてレポート作成とレポートの発表を行い、発表の練習を行うとともに、他人の意見を聞きレポートの内容を再考するとともに、質問に答える練習をすることが必要である。

ディベートはその性格から賛成か反対かはっきりと分かれる事柄をテーマとして取り上げるのがよい。なお、ディベートは準備段階から十分な指導を行わ

ないとただの一方的主張になるので注意が必要である。

それでは、作業学習はどの時点で行えばよいのだろうか。中堅の学校の場合、広義の作業学習である白地図での作業等は、それに関連する事項の学習中に位置等を確認するために行わなくてはならない。他方、狭義の作業学習であるシミュレーション教材等は、学習内容の定着を行うためのものであるため、教科書の各単元の内容終了後に行うことが望ましい。したがって、中堅の学校では作業学習のみで進む授業もまた問題であると考えている。これに対し、底辺校の授業は、そもそも講義形式の授業に集中させることが難しい面もあることから、作業学習を中心に講義形式の授業を織り交ぜて行うとよいのではないかと考える。

作業学習は指導する教師の力量が問われる指導方法であり、十分な授業の計画・準備の後に行わないと教えた内容が生徒に十分伝わらないことがある。また、シミュレーション教材にしても地域調査にしても、まとめて発表できるテーマであれば、しっかりとまとめの指導を行った上で、発表とそれに対する質問・討論を行うべきであり、このようにすることにより、まとめる力や問題解決に向かう力が習得されると考える。

4. おわりに

以上、教職課程で学ぶ学生を念頭に、新任教員に望む姿勢と生徒の学力、学習事項定着のために筆者の行ってきた作業学習の概要についてまとめた。作業学習、特に地域調査の方法に関する学習指導については現在改良検討中であり、今後報告を行いたい。

参考文献

- 大野 晋・上野健爾（2001）：『学力があぶない』。岩波新書。
 武市伸幸（2017）：シミュレーション教材を用いた作業学習について。教職課程研究, 27, pp.1~16。
 武市伸幸（2019）：地域調査の方法とそのまとめ方の指導について。教職課程研究, 29, pp.1~14。